
状況把握

FLASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

状況把握

【Nコード】

N7204D

【作者名】

FLASH

【あらすじ】

「高機動幻想ガンパレード・マーチ」の二次創作小説です。速水×舞で、まだふたりがパートナーになりたての頃のお話です。速水だって、最初は弱いんです（笑）学校に姿を見せなかった速水に、舞の取った行動は……？

第1話

「げほっ、げほっ！」

痛ましい咳の音が室内に響き渡る。部屋の片隅で寝ていたアメリカン・ショートヘアがうるさげに耳を動かした後、抗議するように一声鳴いた。

「ああ、うるさかった？ ごめんね」

部屋にしつらえられたベッドの上で、この家の主はすまなそうに謝ったが、その声はひどくこもったものとなっている。いささか赤らんだ顔には汗が浮かび、髪の毛が幾筋か額に張り付いていた。

猫は再び一声鳴くと、飼い主の様子も知らぬげにひらりと寝ていたソファから飛び降りる。飼い主 速水厚志は小さく苦笑すると、天井に視線を向けた。

いつの間に時間が経ったのか、窓の外はすっかり茜色に染まっていた。

「ふう、結局学校に行けなかったなあ……。芝村、怒ってるかな？」彼のクラスメートにして、二足型歩行戦車を操るパートナーでもある芝村舞のことを考えると、彼の胸はかすかに病とは違う高鳴りを覚えた。

まさかこの自分が抱くことになるとは思わなかった感情を、彼はいささかもてあまし気味にあれこれと考えていたが、それについての答えはとうの昔に出ているのだから、今さらなにを考えるでもない。

とりあえずその件については脇に置いておくことにするが、速水の思考は舞のことから離れようとはしなかった。

「これじゃ今日は3番機、出撃できないよなあ。まあ、警報も出ていないから大丈夫だとは思っけど……。芝村、今ごろどうしてるのかな？」

そう思いかけ、思わず苦笑が浮かんだ。どうしてるといっても、

今の時間なら学校にいるに決まっていたからだ。

「ふう……」

喉の渇きに耐えかね、彼は傍らに置いてあったペットボトルを取り上げると、すっかりぬるくなったスポーツドリンクを数口流し込んだ。

喉がうごめくたびにゴロゴロと鈍い痛みが走る。全身もひどくだるく、まるで身体がすっかり布団に張り付いてしまったかのようだ。速水たち第6世代の体力は他の世代に懸絶したものがああり、細菌などの病原体に対する耐性もきわめて高い。それでも、抵抗力が落ちるときもあるし、疲労と無縁でいられるわけでもないのだ。

「しょうがないな、とりあえず今は覚悟を決めて、ゆっくり休むとしようかな。……でも、おなか減ったなあ」

腹が小さく音を立てた。

いかに病人といえど、まる1日なにも固形物を口にしていなければ腹も空く。速水はしばし恨めしげな視線を台所に向けた。

台所まで行けばなにがしかの食料はあるだろうが、あいにくすぐに、しかも病人が食べられるようなものはストックしていないし、料理など、とてもではないができそうにない。立ち上がっただけでひどい悪寒とめまいがするのでは、無理に包丁を握ったとしても自分を調理するのが関の山であった。

しばしの検討の後、速水は胃腸からの要請を却下することに決めた。が、それでおさまるはずもなく、彼の胃は抗議の声をあげ続けている。

速水はスポーツドリンクをさらに口に含んだ。とりあえず空腹感は遠のいたが、ペットボトルの中身はほとんど空になろうとしていた。

速水が胃袋との際限のない攻防戦を繰り返しているころ、 512

1小隊はとりあえず平和だった。

緒戦をどうにか戦死者なしで突破し、3月半ば、つまりつい数日前にどうにか編成完結した部隊としてはまずまずの成績を上げることもでき、部隊としてはなかなか順調な滑り出しを見せていた。

しかし、その代わりといっってはなんだが、問題点も山のように出てきたのはある意味当然である。訓練不足もさることながら、装備の不足がこれまた大きい。

かつて行われた第2次防衛戦では「足りぬ足りぬは工夫が足りぬ」という言葉があったそうだが、今は持てる工夫を、それこそダース単位で行わなければどうにもなりそうになかった。

結果、彼らは授業もそこそこに訓練に整備に明け暮れることになる。そのせいもあって、ハンガー内はいつにもまして喧騒に包まれていた。

すっかり新たな戦場と化したハンガーの一角、2階に当たるコックピットを支える整備台では、芝村舞がメンテナンスハッチを開いて、なにやら作業にいそしんでいた。

各種回路にテスターを当て、チェックし、必要とあらばすばやく修正する。地味だが、それだけに無視することのできない作業を彼女は黙々とこなしていた。

「む……」

口数少ないまま、舞の手は休むことを知らない。もっともそれは、話をする相手がいないというのが最も大きい原因であった。

いささか乱暴　　というか、気ぜわしげな雰囲気のまま、いつもより更に早い手つきで次々に処理を進めていく。

「……よし、コックピット周りのチェック完了だ。速水……あ」

メンテナンスハッチを閉じながらそう言いかけ、舞は思わず口を閉じた。すばやく辺りを見回したが、誰も近くにいなかったのは幸いであった。

……どちらにとって幸いであったのかは、にわかには断言しかねるが。

舞は小さく息をつく、無言のままハッチを閉じる。物資もなにも不足する中、私費まで投じて行った整備は、彼女に軽い満足感を与えていた。

だが、少し不満もある。

「速水め、休んだりするとはなにごとだ。まったく、敵は待つてくれぬというのに……。そんなことで、敵襲があつたらどうするつもりだ」

口に出しているうちに感情が昂ぶってきたか、だんだんとその声が大きくなる。だが、ふと舞はなにか考え込む表情になると、ぽつりとつぶやいた。

「……それとも、20キロも走らせたのが原因であつたか？」

あんな、そりゃ無茶つてものである。

「し、しかし、結果的にはそのような距離になつてしまつたが、あやつも無理なら無理とはつきり言えばよいのだ。それを、あやつは……」

舞の独り言　いささか声は大きかつたが　は、留まるところを知らぬ。

話は昨日にさかのぼる。

授業そのものが自習になつたのを幸い、舞は速水を引き連れて、強化訓練を行つていた。むろん、自分も例外ではなく、ふたりは黙々とグラウンドを走り続けた。

決してペースは早すぎることもなく、また、3月の午後という陽気は走るのにかなり都合がよかつたが、それでも時間が経つうちにふたりの額には大粒の汗が浮かんでいた。

後半になると、速水のペースは目に見えて落ち、足元がいささかおぼつかなげであつたが、それでも彼は足を止めようとはせず、懸命に舞の後を追いかけた。それでも彼女が知らず知らずのうちにペースを落とさなければ、もしかしたら途中で倒れていたかもしれぬほどに、完走した彼は疲労困憊の極にあつた。

しかし、なぜ私はペースを落とすのだ？

最初は純粹な疑問のつもりだったが、不意に速水の顔が思い起こされ、舞はかすかに狼狽した。あのときの目、まるで子犬のようにひたむきに自分を見つめ、追いつがってきた彼。

「な、なにもあそこまで無理をすることはないのだ。それをあやつは、あ、あやつは、その……」

いつの間にか頬が熱をもっていることに気がつき、舞は大きく首を振る。昨日の話にはまだ続きがあったのだ。

訓練終了と帰宅を告げた舞に、速水はこう言ったのだ。

「もう少し続けてから帰るよ」と。

莫迦めが、あまり無茶をしすぎれば、こうなるのは分かっていたらうに。

だがそれは、引き止めなかった彼女にも責任がある。そう思っていた。

だが、止められなかった。

彼の目に浮かんだ何者かが、舞をして声をかけそびれさせたのだ。いつもひたむきで、彼女の言葉に素直に反応し、あどけないと言っているほどの笑顔を浮かべる彼。

舞の頬の熱は、いまや留まるところを知らなかった。

「え、ええいつ！　なんだ、その、ここは暑すぎるぞ！　空調は一体どうなっているのだ!？」

喧騒と熱気も確かにあるとはいえ、すっかり宵の気配をたたえた涼風が吹き込む中、舞はしきりに胸元に手をやりながら汗を拭いた。

今度は、彼女の心臓がランニングを始めたようである。

多少落ち着くと、ようやく周囲に目を配る余裕も生まれてきた。

まだ時刻は早く、周囲では装甲を外したり、パーツを運んだりする音で実に賑やかである。

舞はふと窓外に目をやった。既に日が落ちかかっているらしく、紅く染め上げられたグラウンドに影が長く伸びている。

と、ふと彼女の胸中にある考えが浮かび上がってきた。

最初はその内容の意外さに　少なくとも彼女にとっては　驚きを隠せなかったが、子細に検討を続けていくうちに、それは一定の価値を持つような気がしてきた。

舞は再びしばし考え込むと、そのプランを実行に移すことに決めた。

「まあ、なんだ、その……。状況は把握しておくにこしたことはないからな」

ようやく収まったはずの頬の熱は、いつの間にか再びぶり返していた。

(つづく)

第2話

工具まで片付けてしまうと、舞にはまったくやることなくなってしまうた。

辺りには金属の触れ合う音と、互いに交わされる怒声に近い会話が満ち満ちていたが、彼女にとって、それは既にひどく遠いものとなっていた。

外はすっかり日も落ち、わずかに西の空に茜色の名残が残るばかりになっている。とはいえ学兵にとってはむしろこれからが本番であり、やるうと思えばまだできることはいくらでもあつたろうが、舞はどうもその気にはなれなかった。先ほどの考えが心の大半を占めてしまった事も確かにあるのだが、訓練には一応目処がつき、整備は今見た通りという、一応もつともらしい理由がある。

自らを縛る枷が存在しない事を確認した舞は、さっさとその場を後に しかけて、数歩進んだところで急停止した。

眉間にしわを寄せ、あごに手を当てながら思索することしばし、自らのアイデアに重大な問題点があることに気がついたのだ。

こ、こんな時は、一体何をすればよいのだっ？

……いや、そんなことは最初に気がつけ。

ハンガーでの「戦い」はようやく一段落つこうとしていた。

かなり修理が難儀すると思われた1番機も、右腕の交換で戦線復帰が可能と見込まれ、手間のかかる神経接続と人工筋肉の解凍も、間もなく終了しようとしていたのだ。

部隊の主力兵器たる人型戦車・土魂号。

これが1機、戦場に出られるかどうかは、戦局を大きく左右する。ましてやそれが 結果的にはいえ 部隊の先鋒を務める1番

機であればなおさらであった。

そういう意味では、今のほうが痛いのかもしいないけどね。

漆黒の機体を見上げ、整備班長たる原は心の中でだけつぶやいた。彼女の視線は別の機体へと動いている。そこには人型という基準からやや外れた、腰に大型ランチャーを装備した機体がじつとくまっていた。

こういうときは、複座つてのは面倒よね。ま、今は機体よりパイロットの方なんだけど……。なにしろ……。

「班長、すみません」

思考が、背後からの声で中断する。原が振り返ると、そこには彼女の右腕でもある森が、リストを抱えて立っていた。

「何？」

「1番機の右腕接続完了しました。続いて再装甲化に移りたいと思えますが……」

森の報告を聞きながら、原は受け取ったリストに目を落とし、なにやら考え込んでいた。

「そう……。右腕の反応はどう？」

「反応率96.2です。筋肉の解凍が完了してからのチューニングで、102前後までは持つていけるでしょう」

「そう、それならいいわ」

整備する以上、従前の通り、いやそれ以上の仕上がりでなくては意味がない。物資不足と品質の悪化が懸念される中、彼女の部下は十分以上の働きをしている。そう評してよかった。

だが、顔には出さない。

「装甲のストックは？」

「十分とはいえませんが、右腕くらいならなんとかあります。いざとなれば外した腕からひっぺがした分の再利用で……」

「……？」

急に声が途切れたのに不信を覚え、原はリストから目を上げ

軽く目を見張った。森は明らかに恐怖の表情を浮かべながらこちら

を見ているではないか。

いや、違う。

彼女の視線は原からわずかに外れている。そう認識した瞬間、原の背筋をなんともいいよのない寒気が走り抜けていった。

「!!!」

意識より早く、体が防御姿勢をとる。半ば身構えて振り向いた原は、そこに先ほどまで思考の中にいた少女が立っているのを見た。

「し、芝村さん……?」

「原よ、話がある」

舞の声は静かなものであったが、その表情はどこか思いつめた雰囲気すらある。自然と原の目がすっと細められ、同時に森の体の震えが大きくなった。

「芝村十翼長、この私に話とはなにかしら?」

舞は黙って、顎で外を指した。

原の背筋がかすかに震えた。彼女には芝村に追われるであろう理由の心当たりがあつたのだ。

いよいよ、かしら?

「森さん」

「はっ、はひいっ!?!」

「右腕の装甲化、任せたわ。適当に処理しておいて」

「は? ……はい、了解しました。あの、その、班長?」

「ああ、悪いけど私、ちよっと出てくるから。それじゃよろしくね。

……行きましようか、芝村さん?」

舞は黙ったまま、先に立って歩き始める。原は肩をすくめて後に続くが、背中にはむしろ刃にも似た雰囲気が漂っていた。

「は、はああ……」

わずかに空気が緩み、森が肺の底から搾り出したような大きな息をついてその場へたり込むと、あちこちから似たような息が漏れ出した。

気のせいか、土魂号までがわずかに身じろぎしたようである。

涼風がふたりの頬を撫でていったが、彼女らの間には灼熱の鋼にも似た緊張感が漂っていた。いや、もしかしたらそれはひとり原だけが感じていたものかも知れぬ。

常にこの日のあるを覚悟していたとはいえ、今彼女の目の前に立つ舞は、それこそ悠揚迫らぬ態度で原を見据えている。自身も身を守る術は心得ているとはいえ、現役の士魂号パイロットとしての訓練と戦技、そしてなにより緒戦での華々しい戦果を目の当たりにしては、勝てるなどと思うほうが愚かであった。

まあ、ただで負けるつもりもないけどね。

原は腰の作業用ポーチにそつと手を這わすと、中のごつい感触にかすかに安堵した。

「……で、お話って一体、なにかしら？」

戦いは主導権をとったものが制する。原の行動はまさにその原則にのっとったものであるが、舞の反応は予想外のものであった。

「ん、あー……そのだな、なんだ……」

「……へ？」

原がすつとぼけた声を上げながら凝視する中、舞は薄暗がりの中でも明らかに頬を紅潮させ、あちらこちらに視線を走らせたり身じろぎしたりしていた。その姿はどう見ても、これから戦いを行おうというものではなかった。

い、一体、どうしちゃったの？ この子……。

なおも逡巡する様子を見せた舞であったが、やがて意を決したか、鋭い視線を原に向けた。

来たっ！

「原よ、そなたを女と見込んで聞きたいことがある！ その、見舞いとは……どうすればいいのだ？」

「……はあ？」

原は、たつぷり10秒ほどの間を開けた後、力いっぱい呆れた叫びを上げた。

一陣の風が、寂しげな音とともに通り抜けた。

「……ふーん、つまり速水君の様子を見に行きたい、とこういうわけね？」

「そ、そうだ」

舞は顔を赤くしながらも、はつきりとうなずいた。その様子を原は、目に面白そうな光を浮かべて眺めている。

まったく、意外なこともあったものね。あの芝村が、こともあろうに他人の見舞いですって？ いや、もしかしたら……。

ふと思いついた事実を確かめるべく、原は口を開く。

「心配なのかしら、彼のことか？」

「し、心配などしておらぬっ！ た、ただそのだな、昨日少し訓練をやりすぎたこともあるし、それで体調を崩したのだとしたら、その、私に責任がないわけでもないし、パートナーとして……そう！ パートナーとしていざ戦闘に赴けないのでは、何の意味もないのであるし……」

怒涛のごとくに流れ出す舞の言葉に、そして彼女の言葉の奥に流れる想いに、原は今度こそ本気であっけに取られていた。まさか芝村が、人を人とも思わぬ、と原の信じていた芝村から、これほどに人間的かつ素直な反応が帰ってくるとは、それこそ思いもよらぬことであつたのだ。

今原の目の前に立つのは、芝村一族の末姫でも、謀略に長けた敵でもない、ただの少女である芝村舞が立っていた。そう理解した瞬間、原の口元に押さえきれぬ笑みが浮かんだ。

意外といえば意外だけど……。結構、可愛いところもあるじゃないの？

「な、なんだ？ 何か私はおかしいことを言ったか？」

「いえ、別に……。そう、それで私のところに聞きに来たってわけね」

明らかに不安すら忍ばせた声に、原の笑みが大きくなる。舞は顔

を更に赤らめながらも言葉を継いだ。

「そうだ。芝村は知らぬ知識を吸収するにやぶさかではない。是非教えてもらいたいのだ」

「いいわ。……といつても、いつぺんにあれこれ言つても、今からじやできることに限りがあるから、簡単にだけどいいかしら？」

「う、うむ。それで構わぬ。原よ、そなたに感謝する」
「気にしないで、大したことじゃないから」

すでに、原の声には緊張のかけらもなかった。それどころか、年長者としての余裕すらにじませている。芝村への　少なくとも舞への評価を大いに改めながら、原は伝えるべきことを吟味し始めた。
「とりあえずこの時間だし、速水君も動けないんだろうから、差し入れでも持つていくつてのはどうかしら？　それなら彼の部屋を訪ねるにもちゃんとした理由になるでしょうしね」

「さ、差し入れか？　……その、どんなものを持つていけばよいのだ？」

舞の言葉には疑問のかけらもない。この辺りが彼女の父をしてとんでもない事柄を吹き込ませる原因だったのかも知れぬ。

原もかすかにそのような欲望を感じはしたものの、なんとかそれは踏みとどまることに成功した。後々のことを考えれば不利になるのは分かっていたし、それよりなによりあまりに無防備な彼女の姿に、それはいささかはばかられるような気がしたからだ。

「そうね……。食べ物も持つていったほうがいいわね。多分起きられないんだろうし。でもカップめんとかはだめよ？　多分そんなものは食べ飽きているだろうからね」

「う、うむ……」

原としては、暗に手料理でも作つてやれ、といったつもりだったのだが、果たしてどこまで通じたものか。

これは、あまり期待はしないほうがいいかしらね。

「それと、できれば部屋の掃除でもしてあげるといいんじゃないかしら？　なによりも男のひとり暮らしつてのは、そりゃもう……」

この後約数分にわたり、男のひとり暮らしの部屋がいかに悲惨かつ汚れているかを、原は手振り身振りも交えて、微に入り細をうがって教え込んだわけであるが、どうしたわけか話を聞けば聞くほどに、舞の顔がかすかに青ざめていくようにも思えた。

「……？ 芝村さん？ どうかしたの？」

「い、いや、なんでもないぞっ！ 原よ、先を続けるがよい」

ちよつと、脅かしすぎたかしらね？

そんな気がしないでもなかったが、舞が全然別の理由で背中に冷汗を流しているようとは、この時の原には知る由もなかった。

こ、こやつ、我が部屋を見たことがあるのかっ？

どうやら、おおいに覚えがあるらしいが、それはさておき原の講座は続いていた。

「それと、水分は忘れないようにね。スポーツドリンクなんかいいんじゃないかしら？ 熱があると汗をかくし」

「ふむ、そうなのか」

「それにね」

なぜかここで、原はにやりと笑みを浮かべた。

「？」

「勢い余って運動なんかしちゃうと、水分が欲しくなるし、ね？」

「……？ 何を言っている、熱があるのに運動などするわけないであろつが」

「……あー、まあ、いいわ。今言ったことは気にしないで」

やっぱり、分かんないか。まあ、これからもチャンスはあるだろつし。

……一体、何を期待してるのだ、あんたは。

ともあれ、原から一通り聞いた事柄を記憶の中へとしまいこむと、舞は深々と頭を下げた。

「すっかり時間をとらせてしまったな。数々の教授、感謝する」

「それは構わないけど、行くんなら早いほうがいいと思うわよ？」

時間をとらせちゃって悪かったわね」

「う、うむ……」

舞はうなずきはしたものの、なかなかその場を去ろうとはしない。その表情にはいまだ惑いの色があった。

原はその様子をじっと見詰めていたが、不意に何かを思い出したのか、ぽんと手を叩いた。

「あー、そういえば本校の女の子たちも彼のこと気にしてたっけ。ひよっとしたら見舞いに行こうなんて話もあるんじゃない……」

「！」

次の瞬間、一陣の風とともに舞の姿が掻き消えた。晴れ行く土煙の中、彼女の姿は、リテルゴルロケットでも背中にしよったような勢いで校舎の向こうへと消えて行こうとしていた。

「まったく、こうでも言わなきゃ動かないなんて……。ふふっ」

原は思わず素直な笑みを浮かべていた。むろん、女子高の女の子たちが見舞いに行こうなんて話はまったくたくない。

「ま、頑張んなさいよね。……楽しみにしてるから」

原の笑みが、先ほどと少し種類の違ったものに変わった。

果たしてこれが気遣いなのか、それとも彼女の「個人的趣味」に関連したものであるかは知る由もなかった。

(つづく)

第3話

「ふ、ふあつくしよ！ はくしよんっ！ へーつくしよっ！！」

ちようど舞が原と対峙し、それに対して原が最終的解決を打ち出さんとしていたほぼ同時刻、とんでもないレベルのくしゃみが連続して速水の部屋にこだました。

「うう、いたたた……。なんだろう、これってやっぱり悪化してるのかなあ……？」

速水は苦笑しながら傍らに手を伸ばしたが、ペットボトルの中身はほとんど空になっていた。何回か振ることでようやくこぼれ出たわずかな残りで喉を湿らせると、彼はペットボトルをそのへんに放り出す。

「これで飲み物はおしまい、と……。そろそろ本気で買い物に行かなきゃいけないかなあ？」

つぶやいてはみたものの、それが可能だとは当の本人がとても思えなかった。

先ほどからさらに熱が上がっているようだし、咳もひどい。おまけになぜかやたらとくしゃみが頻発しており、散々に痛めつけられた胸が鈍痛を発していた。

とどめとでも言わんばかりに、踏み締めるべき足が主人の意志に逆らいまくっているような現状では、作戦成功の可能性は限りなく低いと判断せざるをえなかった。

少し動いただけでも軋みをあげるようになった身体をいたわりながら、速水はそつと横臥の姿勢をとった。

「ふう……」

わずかに体が楽になったことで、再び何事かを考える余裕も生まれてきたが、しばしの間とりとめもない思考をもてあそんだ後、彼はそれを全て意識のゴミ箱へと放り込んでしまった。

「ともかく今は、少しでも早く体力を回復しなきゃなあ……」

先ほどから寝てばかりで、おまけに空腹と喉の渇きも再び強まってきた中で眠れるものかいぶかしんだが、予想に反して、目を閉じるとほぼ同時に彼の意識はふっと途切れた。それほどに、体力を消耗していたのだ。あとには、いささか苦しい寝息だけが残された。

寝息を除けば、室内に聞こえるのは時計が時を刻む音、台所で蛇口から滴が垂れる規則正しいリズム、そのくらいでいや、それだけではない。

室内ではないが、玄関のあたりでなにやらがさとした気配が聞こえてくるではないか。外に目を転じれば、特徴あるポニーテールがあるかなきかの風にかすかに揺れていた。

「つ、ついに、ついに到着してしまったか……」
舞は緊張を隠せない声で、小さくつぶやいた。手に提げたビニール袋には、なにやら荷物がぎっしりと詰め込まれ、持ち主の心情を表すかのように揺れていた。

原から受けたアドバイスを呪文のように唱えつつ、あつちへふらふら、こつちへうろつろと散々寄り道と放浪を繰り返したあげく、それでもどうにか所用を満たす　と、思われる　物を手に入れることには成功した。

だが、いよいよ最終目的地に到達してみると、そこから足が一步も動こうとはしなかった。たいした運動量でもないというのに口中はすっかりからからになっており、先ほどから心臓の鼓動は重砲の射撃並に盛大な音を立てている。

「お、落ち着け、落ち着くのだ芝村舞。すべては原に聞いてきたではないか、その通りにちゃんと準備はできた……と思う。恐れるべきなものもないのだっ」

自分にそう言い聞かせてみても、状況は少しも改善しない。むし

る悪化の一途をたどっているようにも見える。

額に浮かんだ汗をぬぐいながら、舞は大きく深呼吸した。

なぜ落ち着かないのか、本当のところは彼女の意識はとうの昔に理解していたが、同時にそれは舞にとってかつて遭遇したこともなく、想像もつかない理由であった。

そういえば、お、男の部屋に入るなど、これが初めてだ……。

不意にそんな考えが浮かび、舞は激しく首を振った。

「いいいいいやいや、わ、私は何を考えている！？ 私はただパートナーとして、そう、ただのパートナーとして気がかりだから来たに過ぎぬ、それ以上の何者でも……」

ほとんどひとり演説会に近いレベルになりかけていた声は、急にすぼむと空中に霧散してしまった。舞はかすかに俯くと、口元に手を当ててわずかに眉を寄せた。

自分でもなんとも言い訳がましい、芝村らしからぬ態度では、何を言っても虚しく聞こえるばかりである。

そうだ、私はあやつのが気になって仕方がない。ぼややんで、たわいで、どうしようもないことばかり言っている奴ではあるし、私を芝村であると知ってからも態度を変えようもしない奇特な奴であるが、そんなあやつが気になって、仕方がないのだ……。胸に、かすかな痛みが走る。理由は分からないながらも、舞はそれをなんとなく自明のものとして受け止めた。それに、そんなふうに考えるとなんだか少し落ち着けたようにも思う。

「……今は、あやつの様子を確かめるのが先だ。それでいい」

舞は意を決したように顔を上げると、ドアノブに手をかけた。

「……」

一歩室内に足を踏み入れたところで、舞は立ちつくし、絶句した。先ほどとは別種の理由で、呼吸困難の金魚のように数回口をぱくぱ

くさせたあと、彼女はいまさらながらに室内を見渡した。

「じつ、これは……」

舞が硬直したのも無理なからぬことであるといわねばなるまい。それほどに、彼女の目の前に広がる光景は信じがたいものであったのだ。

病気の男の子の部屋といったらね、そりゃあもうとんでもないものなんだから……。

先ほど原から聞いた言葉が、幾度も頭の中でリフレインしている。そう、そのように聞いたからこそ、舞にはそれなりの準備も覚悟も、そしてちよつとした安堵もあつた。

だが今、そんなものははるか彼方に吹き飛んでいた。彼女の背中を、いやな汗が伝っていく。

「は、話が違うではないか……」

聞く者が聞いたなら、これが芝村の声かと耳を疑いたくなるであろう。それほどまでに舞の声は弱々しかった。

別に、部屋が想像を超えて汚かったわけではない。想像を超えてきれいに整っていたことが、彼女に衝撃以上のなにものかを与えていた。

いや、良くみれば部屋の隅にうつすらと埃が見えたり、ペットボトルが何本か転がっていたり、流しに洗い物がふたつみつと置かれてはいる。だが、そんなものは舞にとっては些細な、問題以下の出来事であつた。

なにしろこの家は、床が見える。

速水の部屋を蒼き清浄の地とするならば、舞のそれは……。

……腐海？

なにが見られたものではない、だ。

不意に思い浮かんだわが家の現状に、舞は泣きたい思いすらした。いや、目尻にはかすかに光るものさえ浮かんでいる。

と同時に、何とも言いようのない腹立たしさが体の底から沸き起こってきた。それが助けになったのかどうか、舞はきつい一瞥をあ

たりにくれると、寝室とおぼしきふすまを引き開けた。

速水は、そこにいた。

「あ……」

舞は部屋に踏み込みかけ、すんでのところで足を止めた。それから改めて、可能な限り音を立てぬよう一歩、また一歩と忍びよっていく。

やや早い息遣いが聞こえると、先ほどまでの激情はどこへやら、舞はわずかに眉を下げ、より慎重に接近を続けた。

彼女の見るところ、確かに速水の容体は決して良いと言えるものではなかったが、同時に極端に危機を感じるほど悪化する兆候も見受けられなかった。無断で回線に侵入し、多目的結晶経由で診察させた結果も彼女の見立てを支持していた。

ふむ、これなら今日と、明日1日ほど寝かせておけば快方に向かうだろう。

そう理解した瞬間、舞の胸中は何とも言えない、だがあたたかいものに満たされていった。舞は驚きはしたものの、あえて異議を唱えようとは思わなかった。

「ん……」

それまで動く気配のなかった速水が、わずかに身じろぎをした。寝ぼけた声が妙に色っぽい。

こ、こやつはどうして、私より女らしい声が出せるのだ？

そんな舞の想いをよそに、速水はなおも寝返りを打ち 不意に目を開いた。

「！」

「……」

時が止まるなか、ふたりの視線が微妙に絡み合う。が、速水はわずかに首をかしげるばかりである。

「……？」

緊張のあまり、呼吸をすることも忘れていた舞の目の前で、速水はなおも現状が理解できない、といった表情を浮かべていたが、唐

突にある種の理解に至ったようだ。

彼は徐々に驚きを顔に張り付けながら、わずかに身を起こした。

「し、芝村……？」

彼の言葉が、呪縛を解いた。舞は思わず、起き上がりかけた速水の肩を押さえつけていた。

「あ、その、芝村……？」

「休んでいろ、無理をするには及ばぬ」

「あ、うん……」

冷静そのものの声に、速水は素直にしたがった。だが、その声には舞自身が驚きを隠せなかった。そんな声が出てくるとは、今の今まで想像すらできなかったのだ。

ならば、幸いだ。

戦機は、逃してはいけない。

舞は今の精神状態を徹底的に活用することにした。

「まだ熱があるようだ。薬は飲んでいるか？」

「うん。それでもさつきよりはいいみたい。明日になれば行けるかも……」

「たわけ、無理はするなと言ったはずだ。明日1日くらいはようすを見る。もう1日くらいそなたがおらんでも、なんとでもなる。いいいな？」

「う、うん……分かった」

「それでよい」

そこで初めて、舞は笑顔を浮かべた。ふだんの芝村特有の不敵かつ尊大な笑みではなく、実に素直な笑顔だった。

それを見て、速水の顔に熱によるものとは違う朱が差した。気のせいか、動悸も強くなったようだ。

「どうした？ どこか悪化したか？」

「い、いや別に……」

「？ ヘンな奴だな、まあよかるう」

「そうそう、そういうことで……って、芝村？」

「なんだ？」

速水の顔には、純粹な疑問が浮かんでいた。

「芝村、そういえばどうやって入ってきたの？ 確か玄関には鍵をかけたいたはずだけど……」

「ああ、かかっていたな」

あまりにもあっけらかんとした返答に、速水は二の句が継げなかった。

「じゃ、じゃあ……」

「しかしだな」

舞の表情が、かすかに険しいものになる。

「あんな鍵では、まったく何の役にも立たんぞ？ 万一襲撃などあった場合に不用心極まりない。今度、私をもっと強力な鍵を用意してやろう」

「いやだから、聞きたいのはそうじゃなくて！ どうやって入って

……」

「むろん、ドアからだか？ それがどうかしたか？」

「……あー、もういいや。分かったから」

「？」

げげんそうな顔の舞に、速水は力無く笑ってみせた。あえて聞くまでもなかった、そう思っていた。

玄関には、見事に分解されたドアノブが力無く転がっていた。

(つづく)

第4話

部屋の防犯についていささか不安は残るものの、それでも思わぬ来訪者に速水の胸はじんわりとした温かさに満たされつつあった。なにしろ先ほどまで彼の胸中の大半を占拠していた存在が実際に目の前にいるのだ。意識するなという方が無理な話である。

「……な、なんだ速水。わ、私の顔に何かついていないか？」

不自然なほどにやたらとにこにこした表情で迎えられれば、舞ならずともそう言いたくもなるであろう。明らかに警戒感を　そして同時に不安を　抱き始めた彼女に、速水は急ぎ首と手を振ってみせた。

「ううん、別に」

「そ、そうか。……相変わらず、ヘンな奴だな」

「あははっ、そうかもね」

病人らしからぬ彼の明るい返事に、舞は安心するどころか、ますます不審そうな表情を濃くしていった。

「速水、そなた本当に大丈夫なのか？　もしや熱で脳に異常でも発生したのか？　だとしたら直ちに対策を立てねば……」

「ああ、そんなことないから！　大丈夫だから！」

放っておけば、本当に衛生大隊ぐらいは引っ張ってきかねない。かなり苦労しつつも内面から滲み出る笑みを抑え、ようやくのことで速水は病人らしい態度を取り戻すことに成功した。

「なにしろさ、今日1日ずっと寝っぱなしだったでしょ？　話す相手もないでひとりでのって、そりゃもうつらいものなんだから。だからさ、芝村が来てくれて嬉しいよ」

「そ、そうか……？」

速水の最後の一言を聞いた瞬間、舞の頬に素早く朱が走った。彼女はほんのしばし視線を泳がせ、それからようやくのことで言葉を押し出した。

「ま、まあ、恐らくそなたも動けぬであろうと思つてな。それに、ひとりではなかなか思つに任せぬところもあるであろう。そう思つたのだ。だ、だから……」

「ん？」

「だからその、まあ、なんだ……」

言葉が、ふい、と途切れた。

速水は辛抱強くその先を待った。舞は、なんとか言葉を続けようと思つのだが、彼女の脳内に存在するはずの膨大な語彙は、こんな時に限つて無期限ストライキに突入することに決めたようだ。

それでも速水は、敢えて先をうながそうとはしなかった。

視線を感じて、舞の体温が急上昇する。気のせいか、視界の隅が暗くなつてきたような気さえた。

「世界の危機百連発」をむしろ望むところとする芝村において、過去一度も感じたことがないほどの焦りを感じつつ、舞の口から、ようやく最後の一言が転がり出た。

「その、そなたのことが……気にならぬでもなかったのだ」

「うん……。ありがとう」

時がたゆたう。速水はゆっくりと、優しくうなずいた。

一方の舞はといえば、予想外かつ我ながら意外な一言に驚きつつも、心のどこかで何か当てはまったような気もしていた。それは遠い昔、まだ父がいた頃に、共にいた時の感覚にも似ているような気がしたが、それよりもさらに優しくも感じられる。

ななな、なぜそのようなことが……？ わ、私も風邪でも引いたのか？ うむ、そうだ。そのせいに違いはない。帰ったら徹底的な消毒と服薬が必要だな。

意識の一部が上げた抗議を無理やり押さえつけ、舞はそう決めつけた。

決めつけることで少し呼吸は楽になった気もするが、早鐘のような胸の動悸はそう簡単にはおさまりそうになかった。

ほとんどひとり百面相状態の舞を、速水は微笑ましげに見つめていたが、さすがにこれ以上放っておくと酸欠の金魚になってしまいかねない。彼は再び笑顔を浮かべると、ことさら明るい声をあげた。「ところでさ、手に随分いっぱい持つてるけど、それってなにかかな？」

むろん彼には推測がついていたし、舞の言葉から、それは確信に変わっていた。速水の心は知らず弾んでいく。

それはまるで誕生日やクリスマススの翌日、枕もとに置かれたおもちゃが誰にも言われずとも自分のものだ、と理解できた時の感情にも似ていた。もっとも、速水自身はそのような体験をついぞした事はないのだが。

「え？ あ、ああ、そうであつたな」

ようやく我に返ると、舞は手にしていたビニール袋の中をがさごそとまさぐりだした。

「このような時、どのような対応をすべきか良く分からなかったのだな、原にあれこれと聞いてきたのだ」

「原さん……に？」

「うむ。芝村は知らぬことを学ぶことを恥とはせぬ。いろいろと教えてくれたぞ」

は、原さんねえ……？

舞はいささか得意げに胸をそらせたが、速水は逆に、なんとなく暗雲が漂い始めたような、そんな感じがしていた。

だがそれも、ビニール袋から出てきたものを見て杞憂へと変わる。「熱があるなら、相当に汗もかいただろう。喉が渴いてはいないか？」

彼女が取り出したのは、スポーツドリンクのペットボトルだった。買ってからいささか時間が経っていることもあり、びっしりと汗をかいていたが、かえってそれが速水の喉をキリキリと刺激した。

「うん、さつき飲み物が切れちゃったんで、もう喉がからからだったんだ。嬉しいなあ、ありがとう！」

いかにも嬉しげに受け取る速水のはしゃぎ声に、舞の頬も知らず緩んでいた。速水は急ぎキャップを開けると、そのまま喉に流し込む。

うまかった。

砂に水が染み込むごとく、まるで体中の隅々まで涼しさが流れ込んでいくような感覚に、速水は思わず満足のため息をついた。

「ふうっ……」

「慌ただしいやつだな。それほど急ぐこともなかるうに」

予備のボトルを並べながら、舞は思わず苦笑を浮かべた。

「そうなんだけどさ、やつぱり相当に喉が乾いていたみたい」

「そうか、それはよかった。……そういえばだな、速水」

「ん、何？」

「そなた、よもや運動などしておらんだらうな？」

「はあ？ そりゃ、こんなありさまだし、身体なんて動かしたくても動かせないよ。……でもなんで？」

速水の素っ頓狂な声に、舞はうむうむと何回かうなずいた。

「そうだらうな。いや、原が部屋で運動がどうしたというものだからな。やはりそんなはずはなかったな」

「運動、ねえ……？」

新しいボトルに口をつけながら、速水は軽く頭をひねった。

「なんのことだらう、分からないや」

「そうか……。まあよかるう。たいした問題ではない」

それきり、この話題が上ることは二度となかった。

……速水も、水分にありついた嬉しさと熱で、いささかボケていたようである。

何本かのボトルが出ていっても、いまだビニール袋の中にはなにかが残っていた。

もしかして。いや、たぶんそうかな？

速水の期待は、今やその一点に集中していた。普段の舞の言動からして、まずありえないことだとは彼自身思ってはいたが、原の助言があつたという事実が速水の想像の翼をたくましく羽ばたかせていたのだ。

「それとだな。そなた食事はどうしている？」

きたっ！

小躍りしたいのを抑えつつ、速水はいかにも病人です、というスタイルを全身にプリントされたような態度で答えた。

「それがさ、立ち上がるうとするとうらつくし、すぐ食べられるような物もないからどうしようもなくてさ……」

ちようど話が途切れたところで、速水の腹が小さく鳴った。

胃は風邪を引いていないようである。

「……というわけ」

「なるほどな。そんなこともあるうかと思つてな」

言葉は正確に使いましよう。「教えられて」である。

「病人であるそなたの口に合うものを差し入れよ、とのことだったが、カップめんなどは食い飽きているというから……」

速水の鼓動が大きくなる。

え、まさかもしかして、本当に？

だとしたら、瓢箪から駒もいいところである。今日自分は一体どんないいことをしたのであるうかと、速水は思わず回想してみた。

もっともそのせいか、ビニール袋をまさぐる舞の表情と口調が微妙に変化していたのには気がつかなかつたようだ。

「その、私もあれこれ考えたのだが、そうなると結論はこれか、と思つてな」

「うん、うんっ」

速水はすでに、舞の話なぞ聞いてはいなかった。

神経がすべて目に集まっているような真剣さで、彼は舞の手元を見つめている。

その手がゆっくりと引き出される。手の先にはオリーブドラブに彩られた……。

ちよつと待って。OD色？

速水の脳内で、何か警告を発した。だがもう舞の手は止まらない。彼女が引き出した袋には黒字で「陸上自衛軍」の文字がプリントされていた。

自衛軍ご用達、携行糧食II型である。

「あ、ああ、あ……」

「カップめん以外ですぐにどうにかできるとなると、外にはこれくらいしか思いつかなくてな。いや、これでもそれなりに苦労はしたのだぞ？ なにしる自衛軍でも満足に行き渡っていないところがあるからな、それを追跡し、無事回収して……速水？」

話にいささか夢中になっていたせい、ベッドの方がやけに静かになっているのに気がつくまではやや間があった。舞はいぶかしげに顔を上げ 次の瞬間、大きく目を見開いた。

「は、速水っ!？」

みれば速水は、ベッドから半ば身を乗り出すようにして床にずっこけかけていたではないか。舞は手にした糧食を放り出すと、あわてて速水を抱き起こした。

「どうした速水、すっかりしろ。一体何があつたのだ!？」

「強いて言うなら、希望と落胆、かなあ。あは、あはは……」

「何を訳の分からぬことを……。やはりそなた、重症なのではないか!」

「いや、違う、違うんだよ……」

どうやって説得したものかと思案しつつ、速水は頬を熱いものが伝うのを抑え来れなかった。

……そりゃ、希望をものすごい勢いでお預けを食らえば、無理もなかるう。

再び衛生大隊への直通回線に手を伸ばしかけた舞をどうにかなだめ、見舞いの品としてはあまりにあまりな軍用糧食を、袋ごと鍋で暖めさせた。

軍用糧食は本来冷たいままでも食することができるし、I型はいわゆるレトルトパックであるから、その点はまったく不都合はない。とはいえ、いくら何でも病床の身で、なにが悲しゅうて冷たいレトルトなぞ食わねばなんのか、と思うのは自然な感情であろう。幸い、舞もある程度の思慮は働いたのか、持って来たのはシチュウのような汁物ばかりであったから、暖めれば速水でもたいして支障なく食せそうだった。

できれば、もう少しい他のほうに思慮を働かせてもらうつつのは贅沢だったかなあ？

舞によって、いささか危なっかしい手つきで皿に移されたシチュウを平らげ、薬も飲み終えた速水は、ふとそんなことを考えていた。だが、それこそ贅沢というものである。戦闘以外の事象に関して不得手であることは、舞自身から高らかに宣言されているのだから、考えようによってはこれこそ舞の英断であった、そういうべきなのかも知れなかった。

後日彼は、それがまさに英断であったことを理解することになるのだが、この時は神ならぬ身の上、知る由もなかった。

なんてね。でも、食べさせてもらうくらいお願いしてもよかったかな？

あれこれと妄想しつつ、速水は先ほどから気掛かりそうにこちらを見ている舞の方へと振り返った。

「ごちそうさま、おいしかったよ」

「そ、そうか。その……口には合ったか？」

「……うん。おかげでようやくお腹も膨れたよ。ありがとう」

彼は味についてよりも、食欲を満たすことができたことを特に強調した。

事実、空腹感を満たすことができたのはありがたかったし、おかげで少し気力もわいてきたようでもある。だから、感謝はまったく掛値なしの事実であった。

それが分かるのか、舞の表情も柔らかくなる。

「そ、そうか。それならよい。……先ほどよりは顔色も良いようだな。では、私はこれで帰る」

「え？」

「なんだ？ まだなにか用があるのか？ せつかく回復しそうなのだ、今は休養に努めよ」

「う、うん……、そうだね」

なんともあつさりとした終宴に心残りが無いと言えば嘘になるが、確かに薬のせいも、猛烈な眠気が忍び寄りつつあった。

「ふああ……。それじゃ、もう寝るよ。……今日は本当に助かったよ、ありがとう、芝村」

「れ、礼には及ばん。パートナーのことだからな」

顔を赤らめながら、舞は早口でそれだけ言つとその場を去ろうとしたが、玄関でふと立ち止まると、後ろを振り向いた。

「速水」

「ん？」

「……いいな、明日は無理はするな」

「わかった。夜道、気をつけてね」

「心配は無用だ。ではな」

簡素なあいさつとともに、ドアが閉じられた。

「あ、鍵……」

速水がそう思う間もなく、ドアノブが数回カチャカチャと鳴ったかと思うと、鍵のかかる音が聞こえて来た。

芝村に抜かりはない、ということらしい。

完全に気配がなくなっただのを確認してから、速水はそつと忍び笑いをもらした。

まったくもってなかなか「お見舞い」ではあったが、いかにも何事にも真剣な彼女らしい、そうも思える。

それに。

速水の笑みが大きくなる。

彼女は一体どんな思いで、どんな顔をしながら彼への「差し入れ」を決めたのだろうか？

「パートナー、か。でも、僕のこと、少しは気にかけてくれてたんだ……」

先程胸を満たした暖かさが再びゆるやかに満ちてくる。今はそれでもいい。速水はそう思っていた。

段々と視界が暗くなっていく、まぶたはほとんどくっつきかかっていた。

明日も、芝村の顔が見られるかなあ？

そんなことを思いつつ、速水は布団を引き上げると眠りについた。

なんとなく、ふたりの位置が理解できたような、そんな夜であった。

(おわり)

外伝（前書き）

このお話は、本編の後日談となっておりますので、まだ本編をお読みになられていない方は、そちらを先に読まれることをお勧めします。

まあ、単独でも読めますが（笑）

芝村舞誕生日記念、ということぞ。

外伝

九州の地に咲いた、ひとつの花。

それは戦争という荒波にもまれながら、時には翻弄され、やがては波を切り裂きながら、強く、優しく育まれてきた。

花の咲く場所は、第62高等戦車学校。

部隊名称を第5121独立対戦車小隊といった。

少年の名は、速水厚志といった。

本当の名前ではない。この場所に来る前に借り受けた名前だったが、それは別にどうでもいいことであつたし、彼の以前の名前を知つたところで大した意味はなかつた。

まるで春風が服を着たような人当たりのよい彼であつたが、そう見せていた表の顔とは裏腹に、彼にとっては何もかもがどうでもよく、無価値であつた。

とりあえず、ここに来る前にあつた出来事により、意味もなく人殺しをすることはやめようと考えているようになっていたが、といって何をしたらいいのか、皆目見当がつかなかつた。

彼女に、出会うまでは。

少女の名は、芝村舞といった。

ある偉大な、そしてこれほど嫌われているのもそうはいない一族の末姫として、己の一族としての義務を果たすため、そして己自身の目的を果たすためにこの場所へとやってきた。

芝村の名はあまねく知られているようで、彼女とつき合いたいなどと思う者は、彼女自身の言動と態度もあいまって、個性派揃いのこの小隊においても存在しなかつたし、彼女もまたそれで構わないと、気にすることもなかつた。

彼に、出会うまでは。

運命と必然が手を携えた結果、ふたりは出会い、そして戦いのパートナーとなった。

とはいっても最初は言葉を交わす程度のこと。互いに今までに見たことのない存在に興味を持ちはしても、最初はそれだけのことであった。

パートナーとはいっても、それは戦闘の上だけのことで、それ以上の関係ではなかった。

いかに1日が1年に匹敵するような事態の只中にいたとはいえ、今しばらくの時間が必要だったのだ。

ふたりが互いを単なるパートナー以上の存在として意識し出したのはいつのことなのか、はっきりしたことは　おそらく当の本人たちにも　分からなかった。

だが、ひとつの出来事が、少なくともふたりの距離と立ち位置を確かめさせた。

それが、どの程度の影響をふたりに与えたのかははっきりしないが、想いを確かめさせる効果はあったのだろう。ふたりは徐々に近づきあい、惹かれあい　。

ついには、速水が告白を受けるに至ったのだから。

「で、それからふたりは今も幸せに、そして平和に暮らしているのでありました。めでたし、めでたし……　っていつてくれればいいんだけどねえ」

ジャガイモの皮をむきながら、速水は小さく苦笑を浮かべた。傍らにはすでに準備を整えた野菜が切りそろえられており、その時を待っている。

彼がいるのは、舞の家の台所であった。正式に恋人同士としてつき合うようになってから、彼がここに立つことが非常に多くなって

おり、自宅同様の扱いであった。

もつとも、最初のうちは立つスペースすら確保できず、そのために舞が色々と小言をいわれていたことがあったのだが、今ではそれもいい思い出である。舞のほうでは、色々言いたい事があったかもしれないが。

「準備完了、っと」

鍋に薄くバターを引き、さいの目に切った肉。合成ではあるがを炒める。続いて野菜を放り込み、その上から水をひたひたに注ぎ込んだ。

「あとはとろ火でじっくりと。……さて、こっちはこんなものかな」
速水はコンロの火を整えると、テーブルへと向き直った。そこにはすでに美しく飾られたケーキが優美な姿で鎮座ましましていた。生クリームやチョコプレートでデコレーションされたそれは、とてもは闇がひとりで作り上げたとは思えなかった。例えその材料の大半が合成品や代用品であったとしても、味のほうも見た目に違わずさぞかし、と思わせるものがあった。

「ん、こっちも問題なし……。あつ、いけないっ！」
ケーキを覗き込んだ速水の表情がさつと変わる。彼は近くにあったチョコチューブをとっさに掴むと、ケーキ中央に設置されたチョコプレートパネルに素早く文字を書き込んだ。

Happy Birthday Dear Mai

「ふう……。これでよし。危ないところだった」

『なにが、あぶなかったのだ？』

向こうの部屋からの声に、速水は先ほどよりもよほど素早い動きで反応した。

「うっん、なんでもないよっ。……それよりも舞、身体の具合はどうっ？」

エプロンを外しながら、速水は寢室を覗き込んだ。ベッドの上で

はこの家の主である舞が横たわっていた。舞は赤らんだ顔を上げると、潤んだ瞳で入り口の方へと視線を向けた。

「良いわけがなかるう。……だがまあなんだ、先ほどよりはややましになった、というところだな」

「そう、よかった……」

舞のものとは思えないほどのしわがれた声は、速水の心を波立たせるには十分であったが、それでもちゃんと返事が返ってきたことに彼は安堵の息をついた。

彼は部屋に入ると、何の前触れもなく舞のおでこに手を当てた。

「んー、まあ、さつきよりは下がったかな」

「なっ！ あ、あちゆし！？ いや厚志、そなた、そ、それを前触れなくやるなど何度……！」

「だって、前もって言うて逃げるじゃない」

「あ、当たり前だ！ 大体熱など体温計があれば測れるではないか！」

「だって、手の方が手っ取り早いし、微妙な違いも分かるしさ。なんだっいたらおでこで……冗談冗談、やらないって」

まだ疑わしげな目で見つめている舞に、速水は小さく降参のポーズを取って見せた。以前本当におでこで計ったときに、本気の「ぐー」が飛んできて以来、さすがの彼もその運用は慎重を極めるようになっていた。

諦めるつもりはないらしい。

「まあでもこの調子なら、夜は大丈夫かなあ」

「そ、そうか……」

舞も、どことなくほっとした声を上げた。

別にこの程度の病気など、休んでいればそのうちに治癒するのは分かりきっていたし、その気になれば動けないわけでもない。それでも今日は、今日だけは、ちゃんと自分が動けそうだという事実に感謝したい気持ちで一杯であった。

せっかく、厚志が私のために腕を振るってくれるというのだ

からな。

芝村としても、そして、ひとりの少女としても、その思いには応えなかった。

「それにしてもさ」

「？」

傍らに座り込んで、唐突に話し始めた速水に、舞は不思議そうな表情を浮かべた。本人はおそらく意識していないだろうが、そういうときの彼女の表情は実に素直なものであった。

ほとんどの者は知らないちよつとした秘密を堪能すると、速水はどことなく懐かしげに天井を仰いだ。

「いつかとは、立場が逆になったよね」

「……そういえば、そうだな」

舞も、その時のことを思い出したのか、どことなく物思いげな表情を浮かべた。

まだ部隊が結成されてからさほど間もなく、誰もが一般人から軍人への衣替えに四苦八苦していた頃、速水が倒れるという事件があった。

結局訓練のし過ぎによる過労が原因と分かり、自宅での休養となつたわけだが、その時に舞は、すべての勇気を総動員して速水の見舞いに行つたのだった。

「あの時は嬉しかったよ。ありがとう」

「そ、そうか……？ そうか」

舞はほんのりと頬を染め、嬉しそうに微笑んだが、同時に何かを思い出したのか渋い表情を浮かべた。見舞いに行つたのはよかつたのだが、その時持つていった物まで思い出してしまったのだ。

「見舞いについては、今しばらく学習が必要であつたな」

「そんなことはないと思うけどな。……あの時は本当に動くのもつらくって、どうしようかと思つてたんだもの。そんな時に来てくれるってのが、一番嬉しいものなんだよ、舞」

「そんなもの、なのか」

「そうだよ」

舞は一瞬何事かを考えるような表情を浮かべ、そんなものか、と口の中で小さくつぶやいた。

ただ、脳内の一部ではさらに別の思考が進んでいた。

そうかもしれない。例えば今この時、そなたが共にいることが……。

「ん？ 舞、なんだか顔が赤いけど……。もしかして、熱が上がったんじゃない？」

「え？ い、いや、そんなことはない……。だからっ、額に手を当てるなっ！」

さて、熱が上がった原因は、いったいどれであろうか？

そんな微笑まじげな一幕もあったものの、やがてあたりはとつぷりと日が暮れ、ちょうど速水の料理のあれこれも仕上げを迎えようとしていた。

「ん、これでよし、っと。……舞、準備できたよ」

『そうか、今行く』

向こうの部屋でござと音がるのを、速水は辛抱強く待ち続けた。予め宣言されていたこともあって、手を貸そうとはしなかった。

できることまで手を貸すのは、その者に対する侮辱に他ならなかったから。

もっとも、少しでもおかしい様子があれば、救急隊顔負けのスピードで念入りな介護に当たったであろう事もまた疑いなかった。

「待たせたな」

ゆつたりと室内に入ってきた舞を見て、速水はそつと微笑みを浮かべた。

彼女はパジャマからジーンズとシャツに着替え、その上から厚手のカーディガンを羽織っていた。4月30日という季節の室内着としてはいささか厚手かもしれないが、速水は彼女の判断を是とした。

パジャマでもいいっていったんだけどな。

それでも、こういうところが舞の舞たるゆえんであったし、速水にとっても好ましいところであった。

シチューを皿に注ぎ、適当に切ったパンを添える。温野菜を取り分けると、準備はすっかり整った。今回は舞の体調もあって、小隊メンバーからの申し入れはすべて断っていたから、まったくもって水入らず、ふたりっきりのパーティーである。

「それじゃ、火をつけるよ?」

ケーキに立つたろうそくに火が灯る。電気が消され、オレンジ色の光の中にふたりの姿が浮かび上がった。

「ハッピーバースデー、トゥー、ユー……」

恒例の歌を速水が歌い、舞がそれにぎこちなく唱和する。やがて彼女によってろうそくが一拳に吹き消された。

「舞、誕生日おめでとう!」

「う、うむ。そなたに感謝する」

くすぐつたいような、誇らしいような、そんな何ともいえない感覚が舞を包み込んだ。誕生日など、と最初は相手にもしなかったのだが、こうしてみると、これはこれでとてもよいものであるようにも思えてくる。

そなたが正しかったのだな。感謝する、厚志。

自然と素直な笑みが浮かんでくる。速水も微笑みながらケーキを切り分けた。

和やかなパーティー。穏やかな時間。

舞の調子があまり良くないのにも関わらず、速水はあえてパーティーを強行した。

それには理由がある。

まだ正式に公表はされていなかったが、5月をもって政府は九州・沖縄の放棄を決定した。九州1400万、沖縄80万の国民は、その他地域の安全を図るための捨て石とされたのだ。

だが、速水たちはただ捨てられるつもりもないし、「我が国民」たる九州の人間を見捨てるつもりもない。例え泥と砲煙と血に塗れようとも、なんとしても生き残り、市民が撤退するための楯として戦い続けるつもりであった。

だが同時にふたりは、このような穏やかな日が再びやってくることはないかもしれないことも自覚していた。甘い予測に頼るようでは、芝村としても兵士としても失格である。

だから速水はパーティーを開き、舞はそれを受けた。それはふたりにとっての決意表明であり、また誓いであったのだ。

夜も更けた頃、舞の部屋の明かりがふつと消えた。

ふたりは、ともに寄り添い、睦みあいながら、明日から地獄に身を投じることとなるのだ。

願わくば今日この日の誓いが、ふたりによって果たされんことを。

星が静かに輝きながら、ふたりをそつと見下ろしていた。

(おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7204d/>

状況把握

2010年10月8日15時50分発行